

血縁を越えた新しいつながりをサポートする 「世代間交流ホームシェア事業」

NPO法人リブ & リブ 代表理事 石橋 鏡子

都内の単身及び夫婦の高齢者世帯では7割近くが持ち家に住まい、中には、子どもが自立した後の空いたスペースを社会貢献のために活用したいと考える世帯もあります。自治体のまちづくり相談事業「ホームシェア」や民間事業者による「シェアハウス」などが取り組まれています。高齢者が元気で在宅生活が送れるような仕組みが必要です。そこで市民自らが世代を越えたつながりづくりを実践し、地域社会を活性化しようとしているNPOの新しい取り組みをご紹介します。

「リブ&リブ」の実践

NPO法人リブ&リブは、自立生活の出来る一人暮らしの元気なシニアと大学生をつなぎ、世代を超えたつながりを地域社会の中に作りだし、支え合いながら暮らすことが出来る社会を実現することを目指しています。

活動の中心として「世代間交流ホームシェア」を実施しています。この仕組みは大都市に住む自立した一人暮らし（夫婦でも可）のシニアが自宅の一部を地方から来る大学生に提供するもので、家賃は不要で、光熱費や生活雑費などの負担が基本です。学生は、話し相手や散歩の付き添いなどをしながら、シニアの知恵や経験を学ぶことができます。昼間は基本的にはそれぞれ自由に行動し、夕～夜の時間帯を出来るだけ共に過ごします。学生とともに暮らすことで、シニアは新しい役割を持ち孤独や寂しさが解消され、健康寿命を延ばし、より長く自宅で生活することにつながります。また、学生は経済的な負担が少なく、他人の為に役に立つ自覚が持て、経験豊かなシニアから多くを学べるという相互のメリットがあります。

「下宿・書生」の発展!? 世代間交流ホームシェア

「世代間交流ホームシェア」は、既にヨーロッパでは定着していて何千組のペアが異世代同居を楽しんでいます。ヨーロッパで出会ったこの仕組みを、日本でも実施したいと5年前から準備を始めました。最初は、日本人独特の「他人を自宅に住ませること」に対する心理的な壁により、日本ではうまくいかないだろうと否定的な考え方が主流でした。過去には下宿、書生などの形で若者を自宅に住ませるシステムがあったにもかかわらず、現在は三世同居が激減し、異世代間の交流も少なく、シニア世代と若者の間の相互理解と信頼感が希薄になっています。

しかし、この新しい取り組みに対する若者たちの反応は意外なものでした。私どもが行った大学生へのアンケートや地方の高校での説明会の後の感想文など

では、圧倒的な数で「血のつながりのない異世代の人が同居するという新しいアイデアが新鮮であり、我々は多くの事を経験豊かなシニアから学べる」という前向きな姿勢に驚かされました。

～フランスやスペインの取り組み～

私が世代間交流に共感したきっかけは、長年アメリカ大使館で国際交流の仕事をし、その後外資系企業で社会貢献事業に携わったあとの退職後のことでした。今まで色々な世代と付き合ってきたのが急に顔を合わせるのは高齢者ばかりで話の広がりが見られず、疎外感を感じ始めていたとき、偶然手伝った若者のイベントで、「石橋さんはどう思いますか」と学生に意見を聞かれて、自分の経験がまだ若い世代の人の役に立つという喜びを味わいました。以来、世代間交流の手がかりを求めて欧米・アジア十数か国を調査研究で訪れるうちにスペインでこの取り組みを知り、その後パリでも同じ取り組みに出会いました。

その時に会った、シニア達の輝く笑顔と若者たちの優しい顔は素晴らしいものでした。94才のヴェロニカが「彼女のお蔭で私はこうして元気に自宅で生活できているの」と言ってシェアメートの大学院生を抱きしめた姿は幸せに満ちていました。帰国した日本で目にしたのは、周りに遠慮しながら生きている寂しげな高齢者の姿でした。何とか日本のシニアにも「人と人との新しい出会い



バルセロナの94才ヴェロニカとシェアメート



パリの実施団体代表と筆者

の幸せ」「誰かに喜んでもらう幸せ」「安心・安全の生活」を味わってもらい、これからの人生を楽しく生きてもらいたいと強く感じました。同時に、従来の願いであった、経済的に厳しい状態におかれている地方出身の大学生の夢の実現に手助けがしたいという思いと重なり、困難を覚悟でこの新しい取り組みを日本でも実施することにしました。シニアの知恵と経験を今一度若者のために役立て、一方、若者はそのエネルギーや新鮮な発想力をシニアと分かち合うことで、ともに支えあうことができる豊かな社会に一步近づくことができるのではないかと信じています。

スペインでは既に1999年から、バルセロナの強力な財団が行政と大学と協力しつつ短期・中長期の計画を立てこの「世代間交流ホームシェア」を実施していました。フランスでは、ある夏の猛暑で多くの独居高齢者が亡くなったことをきっかけに、7年前ごろから民間団体が取り組み始めました。ここでは資金は一般市民の寄付、市や国からの助成金で運営しています。

日本にあったシステムを模索して

私どもリブ&リブでは、このスペインとフランスのデータを基に、異文化交流専門家やコミュニケーターと共に日本の歴史・文化に一番合った方法を検証し、日本にあったやり方を実施することにしました。まず、世代間交流ホームシェア参加希望者を面接し（シニアの場合は家庭訪問をして自宅を拝見）条件に合えば会員登録をしていただきます。その上で最適なマッチングを提案し、お試し生活をコーディネートして問題がない場合に、同居同意書を取り交わした後、シニアの自宅で同居を始めさせていただきます。実施後は、定期的な訪問や電話などでコーディネーターによるサポートをします。通常1年を契約期間としますが、延長も可能ですし、ご希望によっては短期間契約も実施しています。

通常1年を契約期間としますが、延長も可能ですし、ご希望によっては短期間契約も実施しています。

パイロットケース始まる

2013年に実施したリブ&リブ初のパイロットケースは、男性シニアと男性大学院生のペアでした。単なる不動産の紹介と違って、今まで違った人生を過ごしてきた異世代二人の同居を実現するための引き合わせ

は、NPOとして丹念に両者の背景・人柄・動機・趣味・好み・習慣・ニーズなどを知ったうえで慎重なペアの提案になります。初のケースでは、シニアの方とは一年のお付き合い、学生さんとは半年をかけてお付き合いをさせていただきました。その結果、出身地も近く趣味なども共通しており、条件全てにぴったりの相手とわかり、お二人も意気投合し縁があったのだと感じた事例でした。ちなみに、このケースは昨年5月にテレビ東京がNEWSアンサーの特集「独居シニアの新しい選択」で放映し、又、11月には日本経済新聞でも朝刊一面の特集「シニアが拓く」で紹介されました。

相互理解のための世代間交流会

欧米人に比べ、日本人は一般的に社交性に乏しくシャイなところが目立ちます。また、三世同居も少なくなった今日では、異世代間の相互理解も信頼も希薄になっています。そこで、リブ&リブは、ホームシェア同居に繋がるか否かに関わらず、世代間交流の機会を作ろうと「世代間交流ホームシェア・ランチ会」を2か月に1回開催することにしました。

1回目は、同居には踏み切れないが学生さんとお昼を一緒にしたいという独居シニアの希望で彼女の自宅で学生4人シニア4人のお茶会をしました。初めから終わりまで笑いに包まれ世代間相互理解の手ごたえが得られ、今後の交流会開催に弾みがつきました。

コーディネーターを育てることも柱の一つ

この仕組みで重要な位置を占めるのは「コーディネーター」の存在です。同居するシニアの自宅を定期的に訪問し、潤滑油としてシニア・学生両方の相談相手となり、相互理解支援に努め、同居生活が完了するまでサポートを行います。

コーディネーターの役目を滞りなく務めることが出来る様に、リブ&リブは「世代間交流同居コーディネーター養成講座（仮称）」を年一回開催いたします。

今後の展望

現在はまだ参加者の一般公募は行っておらず、ご紹介のみでパイロットケースを実施しています。しかし、成功例のデータが蓄積された段階で一刻も早い一般での普及を考えています。全国的に独居高齢者が激増している現在、全国展開も視野に入れています。多くの方々はこの新しい仕組みに参加する機会を提供し、自宅でのより長い安心・安全の生活を手にしていただき、生きていることが実感できて嬉し、笑って暮らせる日々を送っていただけるよう日々努力いたしております。

パイロットケースに参加ご希望の方は、090-6301-1115（石橋）までご連絡ください。